OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	連なり越えゆく世界を感受する ： 石牟礼道子『椿の海の記』
Author(s)	渡邊, 英理
Citation	語文. 2022, 118, p. 12-27
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/95230
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

連なり越えゆく世界を感受する

――石牟礼道子『椿の海の記』

渡邊英理

一、あわいを漂う言葉

一般的にフィクションとして位置づけられる石牟礼道子の『椿の海の記』は、小説として読まれるが、同時に特定のジャンルとして収まり難いテクストでもある。(1) エッセーや自伝ではなく、ノンフィクションではないことは確かだが、フィクションと同定し断言するにはどこか余剰がある。フィクションではないというのではなく、それがフィクションであるにしろ、ほかの何かにしろ、なにか、特定のカテゴリーに同定すると、そこからこぼれ落ちるものがある、そういった感触なのである。(2) その感触は、おそらく、石牟礼道子の文学のおおくがもつ、言葉の横断性や越境性に由来するものだろう。『椿の海の記』は、その冒頭から、その横断性や越境性を顕している。

春の花々があらかた散り敷いてしまうと、大地の深い匂いがむせてくる。海の香りとそれはせめぎあい、不知火海沿岸は朝あけの靄が立つ。朝陽が、そのような靄をこうこうと染めあげながらのぼり出すと、光の奥からやさしい海があらわれる。大崎（うさぎ）ケ鼻という岬の磯にむかってわたしは降りていた。（…）晩春の鳥の声がきこえてくる。磯が近くなって、岩肌をあらわしてくるけもの道の草丈がぐんとひくくなり、新芽を出しつくしたつわ蕗の丸い葉が、岩層に散らばる模様のように広がって、潮のしぶきがかかりそうな岩の上まで降りると、磯椿がまだ咲きのこっている。鳥は椿に来ていて、目白たちが多かった。ここらの椿は、もう真冬から咲きはじめ、そのような岩盤の層をめぐらせている岬という岬をつないで、山つつじの開花までの時期を咲き連なりながら、海の縁を点綴する。そのような岬の影が、朝の海にさしていた。(3)

磯椿が咲き残り、春の花から大地の匂いへ移りゆく季節、せめ

ぎあう海と山、空と海、天と地、複数の境界を横切るものへの感受によって、『椿の海の記』の世界は幕をあける。その言葉そのものように幼い道子は「生類世界」と人間世界を、そして生死の境目を行き来する。人間と非人間を分け、その人間のうちにも序列をつくる社会のあり方を見つめ、それとは異なる世界を希求する石牟礼道子の思想は、すでにしてその言葉のうちに兆していると言えるだろう。

こうした『椿の海の記』における、境界を横断し多義性に満ちた、あわいを漂う言葉は、ジャンルの異なるさまざまな言葉の引用によって織りなされた『苦海浄土』のあり方とも一脈を通じる。『苦海浄土』は、水俣病の患者たちの非在の声の欠片を言語化し、ビラ、政治文書、医師による報告書、患者のカルテ、新聞記事、論文、古文書など多種多様な言葉で織りあげられた、多声的で異種混交的なテクストだ。[4]

のちに『苦海浄土』としてまとめられるその最初期の原稿「奇病」は、「サークル村」六〇年一月号に発表されている。[5]筑豊に移り住んだ谷川雁や森崎和江らが炭鉱の労働者たちとともにたちあげたこの雑誌は、一九五〇年代の「サークル文化運動」の史脈に位置づけられる。[6]一九五〇年代、「無名」の人々が集まって詩を書き、ガリ版刷りのサークル詩誌を作り、美術、演劇、合唱などの活動をし、生活記録や学習のための「サークル」を組織した。「サークル文化運動」とは、このような職場や地域の人々による集団的な文化運動を指し、「サークル」とは「個々の当事者の力を超えた何か」を生みだす集団性の営みである。

今日、「サークル文化運動」の潜勢力を知覚することは容易ではない。高度経済成長期以後、生活の隅々までを浸食するに至った経済原理と、五〇年代に存在した社会主義的運動の歴史性が棄却された冷戦以後の文化構造が、その認識を妨げてしまうからである。労働者をはじめとする多様な「人民」たちが集団という主体で創作する。集団創造されたサークル誌は、市場で売買され私的所有されうる商品とは根本的に異なっている。それらは、私有不可能な共有財産（コモンズ）だ。サークル文化は、詩、版画、幻灯、生活記録など多岐にわたるが、それらは、今日、わたしたちをまるで皮膚のように覆う文化をめぐるスケールやフレーム、自然化されたものさしや枠組みを根底から揺るがすものである。炭鉱の労働者たちによる文化の集団創造をめざした「サークル村」もまた同様の潜勢力を湛えている。

この集団性に富むサークル文化は、同時に市場の価値の否定、すなわち貨幣という「一般等価物」に還元されることを拒むという意味で、とりかえ不可能な単独性をも帯びている。したがって、その文化は、個的でありながら集団的であり、単独的でありながら普遍的でもある。ここに見られるのは、集団と個の再発明であろう。石牟礼というひとりの個人によって書かれた『苦海浄土』の言葉は、とりかえ不可能な固有性を帯びるが、同時に、「聞書き」や引用によって他なる言葉をはらみ集団性や普遍性を帯びる。『苦海浄土』は、石牟礼によって個的な表現として言語化され、そ

の固有の言語によって構築された世界として単独性を帯びるが、同時に、虚構化されることで普遍性を帯び、ある集団性をも宿す。石牟礼道子の文学を読むということは、この個的であり集団的な、単独的であり普遍的な「現場性」（李静和）の言葉に対して、[7]自らを可感的にする行為に他なるまい。それは、より個的な表現に傾斜した構えをもつ『椿の海の記』という言葉を読むという時も同様であろう。

二、交通と（被）開発の時空――チッソ・水俣・一族の歴史

前節で見たように、言葉の質においては一脈を通じる『苦海浄土』と『椿の海の記』は、しかし、これまでやや対照的な位置に配置され読まれてきたようなところもある。『椿の海の記』は『苦海浄土』以前の世界、言い換えれば近代以前の「失われた共同体」を描いた作品として捉えられたり、石牟礼の感性が開花する美学的な作品として論じられたりし、その結果、テクストの内在的な論理が十分に追われず、歴史的社会的文脈から切り離されてしまう傾向もあるように思う。[8]むろん、それらも多義的な『椿の海の記』の一面を捉えていることは確かである。しかし、『椿の海の記』の風景により仔細に目をこらすなら、その水俣は、近代的な交通によって構成される空間であり、なおかつ開発を被る時空として顕れてくる。

『椿の海の記』のテクストは、石牟礼道子の家族をモデルにした白石家が、水俣の街はずれ、とんとん村で暮らす日々を幼女の道子を一人称の「わたし」とし、主な視点人物におき描き出している。白石家の設定は、現実の道子の家族と相似形であり、ほぼ伝記的な出来事に沿って描かれている。元は天草の石工であった白石家が水俣へ移住する。その一家の移動は、チッソの水俣進出、すなわち企業誘致を通じた地域開発という出来事と不可分に結びついたものだった。一九〇八（明治四一）年、水俣にチッソの工場が建設され始業する。[9]作中における道子の祖父・松太郎の家業の石屋は、今日でいうところの土建請負業者で、「水俣に「会社」が出来たというので、天草通いの汽船の港をととのえる仕事を請負い水俣へ来たのである」。[10]祖父・松太郎は、チッソの製品を積み出しする梅戸港の築港や、梅戸港ともうひとつの港、丸島港を「つなげて」「造った」目抜き通り「栄町の道路」の敷設などを請け負った。[11]道子の幼い時分、「わたしの家はとんとん村に来る前に自分たちの作った道路のひとつ、水俣町の梅戸港から町の中心部の四つ角へ結ぶ道すじの、栄町の中ほどに住んでいた」。[12]

天草から水俣へ至る白石家の移動が、チッソの水俣進出と切っても切れない関係にあり、その家族物語（ファミリー・ヒストリー）もまたチッソ水俣工場の履歴と切り結んでいる。そうである限り、戦後にチッソが地域にもたらすことになる水俣病を描く『苦海浄土』と、チッソ水俣工場創設期の『椿の海の記』は時間的な前後関係にあり、（非）連続的な重ね書きの関係にあるとも言えるだろう。したがって、『苦海浄土』を重ね合わせることで、『椿の海の記』の世界はより一層立体性を帯び浮き彫りにもなる。事実、『苦海浄土』には、白石家

と同じ頃、やはり天草から水俣へ渡った一族のその後の姿が掬い／救いとられている。胎児性水俣病患者である江津野杢太郎（九歳――昭和三〇年一一月生）と、その爺さまの姿がそれである。

杢太郎少年は、排泄すら自由にならず、耳は聞こえるものの口をきくことができない。しかし、爺さまは、孫の杢太郎少年を「魂が深い」という不知火で最高の褒め言葉で形容する。「わかるかい杢。お前やそのよな身体して生まれてきたが、魂だけは、そこらわたりの子どもとくらぶれば、天と地のごつお前のほうがずんと魂の深かわい。泣くな杢。爺やんのほうが泣こうごたる。／杢よい。お前がひとくちでもものがいえれば、爺やんが胸も、ちっとは晴るって。いえんもんかのぃ――ひとくちでも」[13]。自らも水俣病患者である爺さまは、その半生を次のように語る。

わしゃ、天草から家別れして、親がびんぼで水俣に、百間港のまだ出けとらん時分にきやした。

水俣にカーバイド会社のでけて、百間にもふとか港のでけるげなちゅうて、梅戸港ばかりじゃ足らんげなちゅう。それで百間港の護岸工事に人夫やとういとう話が天草にも聞えて、それで人夫にやとわれて、銭ためて舟買うて、嫁御もろて、親代々の漁師ばして、水俣で暮らそとおもうて渡って来やした。港が大きゅうなれば人家もふゆる。人家がふゆれば漁師も立ってゆくにちがいなか。

わしゃ三番太郎に生まれて家継ぐこたでけん。水俣ならば、親の家のある御所の浦島からは波の打ちかえすこっちがわの岸。

親のおる島のみえる水俣で暮らそとおもうて、十六のとき人夫になって水俣さね来たとでやす。水俣にゃ会社もでけとる、港も大きゅうなる、遠かアメリカやブラジルや炭坑あたりに募集人につられて出てゆくもんもありよったが、いっぺんよその国に出たが最後、どこで餓死するかわからん。成功して戻ってくるもんもおりゃするばってん、そげんした者は百人にひとりでやす。親のおる島の目の先にめかかっとる水俣も発展するかもしれん。ふとか成功はせんちゃよか、こまんか舟のいっちょ、こまんか小屋ばいっちょ、わが腕で稼ぎだして嫁御もろて子どももって子どもたちに魚釣り教えて、人間並みに暮らそうごたる。

そげんおもうて、水俣の百間の護岸工事の人夫にやとわれて、いわばなぐれてきたとでやした。[14]（傍点原文）

漁師である杢太郎の爺さまは、十六歳のとき、天草から水俣に渡り、梅戸港のあとに築かれた百間港の「護岸工事の人夫」として働いていた人物だ。石屋である白石家のような水俣の土建請負業者に雇われその現場を担った若い人夫のひとりが、杢太郎の爺さまということになろう。爺さまは、人夫仕事で稼いだお金で舟を買い漁師になった。水俣病の患者の多くは、零細な漁民たちであったとも言われるが、その人びととは、天草から水俣へ渡った

「流民」でもあった。問わず語りを続ける李太郎の爺さまは、「朝鮮と支那の境の／あの鴨緑江／流すいかだは／アリャよけれどもヨイショ」と鴨緑江の一節を口ずさみ、[15]そして、次のように語る。

鴨緑江――うんその鴨緑江ちゅう河やつは日本にゃなかごたる太か河げなばい。その鴨緑江をうっとめて、自分がほうに流れをむけかえさせて、このカーバイド会社の野口という人が発電所を作ったげなで――。そのときの陸軍大将にかけおうて、鴨緑江の流ればひん曲げようと思うがどうじゃ、そうやって電気をとれば、自分げの会社は太うなる。会社が太うなれば国のためにもなるちゅうて、陸軍大将ば味方につけて、朝鮮に日本一の会社ば建てらいたげなばい。まあそういう人物が、水俣に会社ば持ってきて据えらいたとですけん、わしゃ、天草の者どもと沖で遭えば心の自慢が口にでて、水俣の自慢話に会社の話をする。あきずに人にも語って聞かせよったとでござす。会社も近年になるほど太うなったちゅうて。[16]

李太郎の爺さまが歌う鴨緑江節は、恵山鎮（鴨緑江に面した朝鮮と中国との国境の町）節とも呼ばれ、佐藤春夫の『わんぱく時代』（一九五七）や中上健次の『地の果て　至上の時』（一九八三）にも登場する。[17]その長さ七九〇キロにもおよぶ鴨緑江は、戦前の満州と朝鮮の国境を西流し、白頭山に源を発して黄海に注ぎこむ。鴨緑江節は、大正年間に流行した俗謡であるが、朝鮮半島に渡った筏師たちから流行した「はやり歌」としても知られている。[18]和歌山県新宮市出身の佐藤春夫と中上健次、木の国・紀州熊野出身のふたりの作家がいずれもこの歌をその小説のうちにとりこむことも、この歌の来歴から理解できる。『地の果て』が「台湾も鴨緑江もこの土地とは昔から材木の取り引きはあった」と語るように、[19]新宮と朝鮮半島・鴨緑江との遣り取りは、日露戦争後に始まる。日露戦争勝利後の明治三八（一九〇五）年の第二次日韓基本条約に基づき、日本は朝鮮総督府の前身・総監府を朝鮮半島に設置し、明治四三（一九一〇）年には韓国併合条約が結ばれる。日本が朝鮮半島を植民地化し、その支配権が固められるなか新宮の材木業者も植民地朝鮮に進出した。[20]明治三八年には、仁川に「木材板商新宮商行」が設立され、紀州材の朝鮮への売り込みを始めている。[21]当初は新宮材の輸出が行われたのだが、満州と朝鮮にまたがる鴨緑江や豆満江流域の森林が開発されるに伴い豊富な地元材に押されはじめる。[22]やがて「新義州（朝鮮）などに店をかまえて、鴨緑材の伐り出しを行う業者」も現れ、その業者の手引きで熊野川の筏師たちも大挙して海を渡った。[23]とくに熊野山中「十津川・北山の筏夫の技術はきわめて秀抜であったので、鴨緑江の筏流しには日露戦争直後の明治三十九年から太平洋戦争終結まで毎年、多数が参加し、また北海道あたりにも出勤して、好評を博した」。[24]こうして拡大する帝国の版図の波の縁にて植民地に渡った筏師たち、流動する労働者の声に鴨緑江節は運ばれたのだ。

この鴨緑江こそ、チッソ所縁の土地である。戦前、チッソは鴨緑江に水豊ダムを建設し、それを植民地朝鮮における電力事業の中心とした。チッソの歴史は、鹿児島県大口の曾木水力発電所から始まるが、日窒コンツェルンとなり、植民地朝鮮で大規模ダムを経営し電力開発事業を展開していくノウハウは、この草創期の曾木発電所で培われたものだと言える。戦前のチッソの収益は、この朝鮮での電力事業に大きく支えられてもいた。[25] 戦後、チッソは国内の水俣に回帰するが、戦後のチッソの経営を支配していくのは朝鮮帰還組であったと言う。町村敬志が言うように、植民地朝鮮でのダム建設の経験や技術は、敗戦により「日本回帰を余儀なくされた企業、建設会社、技術者、官僚などを介し、戦後の大ダム開発へつながっていく」のである。[26] 鴨緑江節が示すのは、このチッソに体現される戦前の植民地開発と戦後の地域開発との連続性だと言える。吉見俊哉がいうように、戦後の地域開発は、この「裏返された植民地的構造」によって進められたのであり、[27] その構造による戦後の開発の結果、水俣病がおこる。杢太郎の爺さまの歌声は、この帝国／植民地主義の歴史と不可分な開発の歴史性とその暴力性を浮かびあがらせる。

対して、『椿の海の記』に描かれるのは、曾木水力発電所からチッソ水俣工場建設にいたる過程である。それは、交通の変化を通じて描き出されている。舟の往来があり、馬車ひきが古い街道を賑わせる。その交通の盛衰をめぐる言及が、それにあたる。「永代橋の川下に出入りする船は、天草、薩摩、長崎、五島、佐賀、三池、三角などへ行き来していて、舟津からは堺や大阪にゆく船さえあった」。「北薩摩の大口と水俣をつないで古くから街道が通じていたが、その途中の布計金山と〝水俣の会社〟が実質をそなえてくると、需要の増えた石炭と石灰とを積み下しする馬車も急増して、大正中期のある時期には、この街道筋は馬車の音が絶えることがなく、その台数を数えてみたら日に三百台は下らなかった」。「いきおい、当時のここら一帯の「銭取り高」は、馬車ひきがいちばん上になったりした」。[28] 「北薩摩の大口と水俣をつな」ぐ古い街道とは、布計金山（鹿児島県伊佐市大口）に石炭を運んだ道である。鹿児島県大口の曽木水力発電所の建設以前、布計金山はボイラーを焚く燃料として石炭を要し、三池をはじめとする各地の炭鉱から水俣港へ、さらにそこから山中の金山まで運ばれた。しかし、曽木発電所の建設後には、発電所からの電力供給によって金山は石炭の需要から解放された。とはいえ金山で使う電力は限られており、チッソの水俣工場には曽木発電所の余剰電力を消費するという目的があったのだ。[29] 他方で、金山で石炭が不要になれば、その輸送運搬を担ってきた馬車ひきたちは失業する。チッソは地元の誘致があって水俣に進出した企業である。チッソの誘致運動を担った地元の有力者たちは、旧塩田の跡地や水利権の提供とともに、この失業した馬車ひきたちの存在が、工場で働く労働者予備軍として見込めるとの謳い文句でチッソを勧誘したとも伝えられる。[30]

貨幣を求め、馬車ひきの仕事に人びとが殺到したように、『椿の

海の記』において、水俣にやってきたのは、道子の一家だけではない。土工として働く若い衆、「女郎屋」と食堂を営む後藤兄弟も天草から水俣に移住する。その「女郎屋」で性をひさぐために天草や長島から海を渡って売られてくる女たちもいた。このように『椿の海の記』は、山の道や海の道、そして人や物など、水俣をめぐる複数の交通、その移動の軌跡を描き出す。したがって、『椿の海の記』の水俣とは伝統的で土着の閉じられた共同体でない。むしろ、それは、近代的な交通や交換、労働力移動と貨幣経済が入り込み、企業進出による開発を被る空間である。近代化される被開発の地域、その過渡期の時空の表象が、『椿の海の記』の水俣なのだ。

三、生産と分解、「生類世界」とコモンズ

『椿の海の記』において、唯一、その年代が記されるのが、昭和六年の「陸軍大演習のみぎり」、窒素水俣工場に天皇が「行幸」した一九三一年である。『椿の海の記』は、石牟礼文学に親しむ者なら周知の、差別に抗するエピソードをここで披露するのだが、[31] 本稿ではこの年代から小説の時空がおかれた歴史的社会的文脈を呼び込み、小説世界における価値の相克を紐解くことを試みたい。

『椿の海の記』は、窒素水俣工場の価値観を描き出し、同時に、それを批判的に対照する小説世界の価値観を提示している。先述したように、チッソが水俣に工場を設立したのは、一九〇八年である。道子が生れた一九二七年には朝鮮窒素が設立され、一九四四年には水豊ダムが完成している。そして、一九三一年、チッソは、アセトアルデヒドの製造に成功する。翌一九三二年、チッソ水俣工場は、アセトアルデヒドの製造を開始する。

ここで、化学工業企業としてのチッソの技術や生産活動の意味を宇井純の解説をもとに素描しておこう。[32] アセトアルデヒドからは、プラスティックやビニールなどの原料になる塩化ビニールが製造される。水俣病の原因はメチル水銀だが、アセトアルデヒドは、水銀を触媒として生成され、その過程で無機水銀が有機水銀やメチル水銀となり、排水として海に流される。工場排水に含まれ流れ出たメチル水銀は、海中の魚たちに取り込まれ、蓄積され濃縮される。その海の魚を食べることでメチル水銀が人間の体内に入り、脳や神経系などが侵されてしまう。水俣病は、このように、もとは自然になかった物質が生態系の循環に入り込むことで起こった。そして、その原因であるメチル水銀の排出を、チッソは、すでに一九三二年にはじめていた。『椿の海の記』の現在時は、アセトアルデヒドの生産が開始された、まさに水俣病のはじまりの時期にあると言える。[33]

その時期を舞台に『椿の海の記』が描きだすのは、チッソの工場生産とは異なる生産、「生産ならざる生産」であり、化学製品のそれとは異なる循環である。宇井純に依拠して説明を続けると、チッソの水俣工場は、創業当初、カーバイドと化学肥料を生産していた。代替燃料であるカーバイドはカーバイトランプとして製品化されるのだが、チッソにとって、より大きな収益の柱となっ

たのが、カルシウムシアナアミド、そして硫酸アンモニアなどの化学肥料であった。チッソが生産する化学肥料は、当初、ヨーロッパの輸入製品におされていたが、第一次世界大戦でヨーロッパからの輸入が途絶え、国内で覇権を得るに至る。さらに、アセトアルデヒドを作る技術が、チッソに大きな躍進をもたらした。アセトアルデヒドの製造が、チッソに、理論的には人造石油の生産までをも可能としたからである。アセトアルデヒドの製造によって、石油の輸入が仮にとまっても戦闘機をとばすことができるとも言われ、またアンモニアからできる硝酸は、火薬の原料ともなった。言い換えれば、チッソとは、軍需製品をつくる軍需産業であり、その要のひとつがアセトアルデヒドの製造だったと言える。[34] このように軍需産業としての貢献あってこそ、チッソは植民地朝鮮へ進出する利権を得ることも可能であったのだ。

『椿の海の記』には、こうした軍需製品へも転じる化学肥料、戦争や植民地主義とも通じる生産や流通とは異なる、生産と循環が描かれている。その第一は、「手作りの暮らしというものが成り立ってゆく道」である栄町通り、[35] その道端におち、堆肥として住民に活用される馬糞である。「祖父の作りかけた道はいのちをあたえられ、そこを往き来するひとたちの暮らしと共に生きはじめていた。人びとは道の上に箒目を立てて掃くとき、まだほやほやと湯気を立てている馬糞などを大切に塵取りにとり入れて、菜園の片隅に運んだり、隣りの里芋畑の、大きな畝の間に運んだりする。馬糞の要らぬ家といえども、百姓たちが取ってゆきやすいように、黒いコールタールで塗った塵箱や電信柱のもとに片寄せておくのであった。すると、山畑行き女籠を荷った女たちが通りかかり、足半草履の先や鍬の先などで、ちょっとつっかけて、有難うございましたと口のうちで礼をいい、女籠の中にかき入れる」。[36] また、町が水に浸かった時に流れてくる木の葉や海底の藻くずなどの「有機分を含む堆肥」である。「それは海辺の家々の一年中の堆肥や薪や、作小屋や風呂小屋の材にさえなった」。[37]

様々に指摘される化学肥料の問題点のひとつは、土の中の微生物を減らし生態系を弱くする、ということである。堆肥の有機物は、土のなかの微生物の食料となるが、化学肥料は、直接、野菜や植物に働きかける。言わば、微生物の分解過程をショートカットしていると言え、それゆえ即効性があり、野菜がよく育つのだが、しかし、その副作用として、過剰に成長する植物を抱え、土それ自体の栄養分も微生物も減少し、生態系の循環は荒廃する。これに対して堆肥は、微生物たちに分解され、別の生き物を生かす糧となる。『椿の海の記』は、この生態系が循環し動植物が往還しあう道、「往還道」を描きだしている。

> 道というものは、もっとも不思議なもののひとつだった。
> つねづね、「ご先祖さまからの生き血のような財産をば、このごとく道に食わせてもまだ足らんじゃった」ときかされていたこともあって、道というものは、なまぐさい咀嚼運動を持っているものに思われた。歩き初めて、自分の足で降り

立ってみた朝の栄町の往還道の上には、酔っぱらいたちの嘔吐や、犬や馬や牛などの排泄物が、たったいま生きものたちの体内にあったようなおもむきで横たわっていたし、鼠やみみずや、かぶと虫や蝶や蝉たちの死骸が、陽の光の中にも草の蔭にもおかれていないことはなかった。草の蔭にはまだ生きている他の虫や蟻たちが、地の下に巣を営みながら地表に湧き出していて、道というものは、そのふところにさまざまの生命を生き死にさせ、牛馬たちの曳く車や、人力車や車力や、はては自動車のたぐいまで往き来させていた。それはほとんど驚異といってよかった。足をおろすにも息をのむ思いでわたしは歩いていたが、道というものは大地と生きものたちの営みの、目に見える条痕でもあった。(38)

工場での生産活動に対して、『椿の海の記』は分解活動を対峙させている。『椿の海の記』「第五章、紐とき寒行」には、女たちによる醤油や味噌づくりが描かれている。言うまでもなく、醤油や味噌は、大豆を発酵させてつくる食品、すなわち微生物による分解の一種によってつくられる副産物である。それは、自然環境に還元不可能なプラスティックやビニールの原料を生産し、生命にとって有害なメチル水銀を副産物とし、自然の循環を乏しくする工場の生産主義に対して、幾重もの意味で対照的な循環としての（非）生産であり、分解としての（非）生産だ。そして、醤油や味噌が発酵という名の腐敗によって出来上がるように、分解としての（非）生産は腐敗とつねに隣りあわせである。しかし、『椿の海の記』は腐敗を道徳的否定性から解き放ち、その分解としての作用に光をあてていると言える。(39) 化学肥料の発明によって、農民は、貨幣経済に浸食され、農業もまた、資本主義的経営を要する産業と化す。(40)「もの」と「もの」の交換によって一定程度は成立していた生活圏が、貨幣によって商品を買う市場の交換、つまり現金を要する社会に変貌していく。こうした貨幣経済に浸食され資本主義化された「しじょう」と「いちば」の差異にも、『椿の海の記』は光をあてる。

かつて人びとは、自分たちの路地の道々を自分たちで掃き清め、掃除することを常とした。ここに見られるのは、道を共有財として扱う態度である。西村佳哲は、その住民がある種の共有地、コモンズとして遇してきた路地の道を掃除しなくなるのは、アスファルトで舗装された時ではないか、と述べている。(41) アスファルト以前、生きた土の道が人びとのコモンズだった時代、道をわけあっているのは、人間同士に限るものではない。幼い「みっちん」が落とした飴を蟻たちが運び、「よかよか、今日は地ん中（じだ）んあのひとたちのご馳走ばい」と贈与する。(42) 互いに他と分けあうことを肯定するそのコモンズは、あらゆる生類たちにとっての共有地である。すなわち、人間と人間ならざるものたちが、互いに他と分け合い、ときに分け与える。人間と人間ならざるものを含む共同性に開かれ、人間を越えて人間以外の動植物たちまでもが切れながらつながる、受動的で偶有性に左右される生きものたちの連なり

の世界、それが、『椿の海の記』が示すコモンズだ。

四、再生産労働、「女」という階級

工場における生産や流通とは対照的な分解としての（非）生産を描く『椿の海の記』が、もっとも多くの紙幅を割く（非）生産、「生産ならざる生産」は、女たちによる再生産労働である。そこに描かれる再生産労働は、家の中に囲い込まれておらず、共同作業として行われている。「流れ川や村の共同井川」で洗い物や洗濯をしたり、農作業を共同で行うなど、家庭的（ドメスティック）な私的領域に囲い込まれない、社会性と共同性を携えている。

シルヴィア・フェデリーチは、かつてヨーロッパのコモンズを支えてきたのは、こうした女たちによる再生産労働であり、それは、社会性と共同性を携えた重要な生産的労働であったことを指摘している。[43] またフェデリーチは、資本主義社会の資本制と私有制によって、コモンズが囲い込みを通じて解体されると同時に、女たちの再生産労働が、労働ならざるものとして、価値を下げられ、同時に、労働者としての女性たちの価値もまた切り下げられたことを述べている。[44] そこでは、市場での価値を生む生産活動、つまり工場での労働活動のような生産だけが、生産的な労働として数えられる。それに対して、女たちが担い、コモンズを維持してきた再生産労働は、市場での交換価値を生まない、ゆえに価値のない行為として、労働の枠外に放擲される。それに伴い、女たちが継承してきた、薬や医療、民間療法、出産や避妊などの知恵が、いかがわしい呪術として排撃される。[45] その一端が、ヨーロッパにおける魔女狩りであったとフェデリーチは指摘する。[46] フェデリーチによれば、ヨーロッパや南米で起こった魔女狩りとは、単に宗教的な異端審問ではなく、資本主義社会における、女性の労働の価値の切り下げの問題であり、女性という階級へのフォビアであったと言える。

キリスト教文化圏ではない日本社会では魔女狩りの例は、必ずしも当てはまる訳ではないが、しかし、家内労働やケア労働、女性の労働が価値の低いものとして位置づけられている点では、同じ現象を共有していると言えるだろう。そのように見るなら、『椿の海の記』が描くのは、資本主義社会によって矮小化された労働とは異なる「労働」だと言える。とはいえ、この非労働の労働を、石牟礼はユートピア的に描く訳ではない。そこには、女たちの厳しい労働環境、桎梏としての労働の姿も掬い／救いとられ、また、「淫売」と呼ばれる郭の女たち、ごんさいさんとおもかさま、婚姻制度の内と外、一夫一婦多妾制のなかで分断され抑圧を被る女たちの苦しみも細やかに描かれている。「「末広の淫売どもが！」／と特別に淫猥な話を持ち出して、あらんかぎりに妓たちを憎悪しているのはこの小母さんである」。[47]「祖母のおもかさまは、いつも、「しんけいどーん」と子どもたちから、町や村の辻々で囃し立てられ、石のつぶてが、彼女をめがけて飛んできたりした」。[48]「老年になってからの妻妾同居は、本妻のおもかさまが人目に立ちすぎる盲目の狂女だけに、部落中の耳目をそばだてずにはおかなかっ

た」。[49]

天地の間にゆくところもなさそうな、めくらで神経殿（どん）の、祖母の姿もあわれのかぎりながら、身じまいのよい「おきやばん」にも、わたしはことに煩悩かけられて、可愛がってもらっていて、そのひとが畜生の化身だと聞かされては、しげしげと襟足のうしろから、おかっぱかたむけて見ていると、この世は凄惨で息をのまずにはいられない。

（…）

地獄はあの世にあらず、この世にこそある。な、心おぼえがありましょうがな。よくよくおなご衆はおのれが心に手を当てて、考えて見られませい。[50]

したがって、『椿の海の記』における女たちの労働は、隠された歴史を回顧し、復権させるためのものではない。そうではなくて、ある特定の搾取の形態を可視化し、開発主義や資本主義的諸関係の歴史を再考するための視点としての意義をもつものだ。この点で『椿の海の記』は、ヴァルター・ベンヤミンが「歴史哲学テーゼ」で示した「歴史の天使」のあり様とよく似ている。

「新しい天使」と題されたクレーの絵がある。そこには一人の天使が描かれていて、その姿は、じっと見つめている何かから今にも遠ざかろうとしているかのようだ。その眼はかっと開き、口は開いていて、翼は広げられている。歴史の天使は、このような姿をしているにちがいない。彼は顔を過去へ向けている。私たちには出来事の連鎖が見えるところに、彼はひたすら破局だけを見るのだ。その破局は、瓦礫の上に瓦礫をひっきりなしに積み重ね、それを彼の足元に投げつけている。彼はきっと、なろうことならそこに留まり、死者たちを目覚めさせ、破壊されたものを寄せ集めて繋ぎ合わせたいのだろう。だが、楽園からは嵐が吹きつけていて、その風が彼の翼に孕まれている。しかも、嵐のあまりの激しさに、天使はもう翼を閉じることができない。この嵐が彼を、彼が背を向けている未来へと抗いがたく追い立てていき、そのあいだにも彼の眼の前では、瓦礫が積み上がって天にも届かんばかりだ。私たちが進歩と読んでいるのは、この嵐である。[51]

現在の破局を感じながら、かといって過去をユートピア化するのでもない。単に後ろをノスタルジックに振り返るのではなく、前に進むことを余儀なくされながらもそれに抗い、同時に、現在の来歴としての過去を見つめ、さらには、語られなかった過去に視線を送る。そして、「成長」と「進歩」が、実のところ、「破局」と「廃墟化」であることをしかと見定め、その「破局」と「廃墟化」の前進運動たる「進歩」の嵐に抗おうとする。それは、あの世に逃避するのではなく、「この世」に踏みとどまりながら、なおかついまある世界を唯一のものとしない姿勢であり、世界に対す

る構えであろう。[52]

墓の中の胎児たちの髪も伸び、有機水銀中毒特有のみそっ歯が、生え揃ったことであろう。彼らの喉が、丈高い草の中の墓地の下でひらく。
私のゆきたいところはどこか。
この世ではなく、あの世でもなく、まして前世でもなく、もうひとつの、この世である。
逃亡を許されなかった魂たちの呻吟するところにむかい、私は、自分に綱をつけてひっぱったり、背中をおしたたいたりして、ずるずるとひきもどす。[53]

二回目の東京五輪が終り、パンデミックを経てもなお、いやむしろ、それらをへたがゆえに、開発の夢や成長への欲望は、わたしたちの社会や世界を強く規定し前のめりに傾斜させているようにも見える。こうした時代の「歴史の天使」の言葉として、連なり越えゆく世界を感受し、「もうひとつの、この世」を狂おしいまでに求め続ける『椿の海の記』は読まれるだろう。

注

（1）石牟礼道子『椿の海の記』は、『文藝展望』に一九七三年から一九七六年に連載。七六年に朝日新聞社より単行本化され、一九八〇年に朝日文庫、二〇一三年に河出文庫で文庫化された。なお『椿の海の記』の引用は、すべて石牟礼道子『椿の海の記』『石牟礼道子全集　不知火　第四巻』（藤原書店、二〇〇四年）に拠る。

（2）カテゴライズを拒否する言葉としての『苦海浄土』については、金井景子「檄文と叙事詩の間に――石牟礼道子『苦海浄土』を読む」『現代思想』二〇一八年五月臨時増刊号。

（3）石牟礼道子『椿の海の記』『石牟礼道子全集　不知火　第四巻』、一一～一二頁。

（4）『苦海浄土』の多声性・多言語性については、佐藤泉「記録・フィクション・文学性――「聞き書き」の言葉について」『思想』一一四七、二〇一九年。

（5）四〇年以上の歳月を経て、三部作として完成される『苦海浄土』の第一部、「奇病」は「サークル村」一九六〇年一月号に発表されている。その後「奇病」は、「海と空の間に／第五回　坂上ゆきのきき書より」（『熊本風土記』六六・六月号）として改稿され、『苦海浄土――わが水俣病』（講談社、六九年一月）の「第三章　ゆき女きき書」となる。『苦海浄土』は、第一部・第二部・第三部からなり、以下のような過程で発表された。
『苦海浄土』第一部「苦海浄土」『苦海浄土・わが水俣病』講談社、一九六九年（「海と空のあいだに」（一）（二）（苦海浄土初稿）「熊本風土記」一九六五年一一月号・一二月号、「海と空のあいだに」（三）～（八）「熊本風土記」六五年一月号・二月号・六月号・七月号・八月号・一一月号）。
『苦海浄土』第二部「神々の村」、『辺境』第一次～第三次、一九七〇～一九八九年。
『苦海浄土』第三部『天の魚』筑摩書房、一九七四年、『天の魚』講談社文庫、一九八〇年。
なお『苦海浄土』の引用は、すべて『石牟礼道子全集　不知火』第二巻（藤原書店、二〇〇四年）に拠る。

『苦海浄土』と「サークル村」／「サークル文化運動」との関係については、井上洋子「『苦海浄土』の円環構造――「ゆき女きき書」はいかにして語りだされたか」『現代思想』二〇一八年五月臨時増刊号。

（6）宇野田尚哉・川口隆行・坂口博・鳥羽耕史・中谷いずみ『「サークルの時代」を読む――戦後文化研究への招待』（影書房、二〇一六年）では、一九五〇年代の「サークル文化運動」の潜勢力に「サークル文化運動」的な集団的共同研究で迫っている。

（7）李静和『つぶやきの政治思想』岩波書店　一九九八年→岩波現代文庫。

（8）たとえば若松美智子は、石牟礼の「高い叙情性、詩情性」を前景化し、「石牟礼道子の美意識の世界」を強調する。「作家石牟礼道子の名前は水俣病と結び付けられ、彼女の作品は告発文学として一般に受け入れられることが多い。しかし石牟礼文学の真骨頂はその高い叙情性、詩情性にあることを、『椿の海の記』の分析を通して示す」。「詩的資質は水俣病患者の聞き書きをよそおった章をはじめ、『苦海浄土』のあちこちにちりばめられているのだが、描写される事実の悲惨さが与える衝撃性によって、詩情性がおおいかくされていることは事実である」。（『椿の海の記』の）「各章がそれぞれ独立した小品として完成されているが、それぞれが相乗されて作家石牟礼道子の美意識の世界を照らし出す」「石牟礼道子の美の世界――『椿の海の記』を中心に」『東京農大農学集報』五三（二）二〇〇八年、一〇七頁。

（9）水俣病の歴史的年代については、主に原田正純『水俣学講義』（日本評論社、二〇〇四年）、および「相思社 web 水俣略年表」を参照した。

（10）石牟礼道子『椿の海の記』「第二章、岩どんの提燈」、前掲書、四四頁。

（11）石牟礼道子『椿の海の記』「第三章、往還道」、前掲書、五五頁。

（12）石牟礼道子『椿の海の記』「第二章、岩どんの提燈」、前掲書、四四頁。

（13）石牟礼道子『苦海浄土』「第一部、苦海浄土」「第四章、天の魚」、前掲書、一五三頁。

（14）石牟礼道子『苦海浄土』「第四章、天の魚」、前掲書、一五三～一五四頁。

（15）石牟礼道子『苦海浄土』「第四章、天の魚」、前掲書、一六三頁。

（16）石牟礼道子『苦海浄土』「第四章、天の魚」、前掲書、一六四頁。

（17）佐藤春夫『わんぱく時代』は、一九五七年『朝日新聞』に連載され、一九五八年講談社より単行本化された。中上健次『地の果て至上の時』は、一九八三年新潮社刊。中上の『地の果て』と石牟礼の『苦海浄土』の関係性については、拙著『中上健次論』（インスクリプト、二〇二二年）を参照のこと。なお、『地の果て』は、腐敗という道徳的な負性で女たちが男たちから差異化され有徴化される言説と表象の体系を可視化し、同時に、その男性中心主義的な規範を腐敗という契機を梃子に転覆することを企てている。

（18）佐藤春夫の『わんぱく時代』には筏師たちに運ばれ新宮で流行した「鴨緑江節」が複数の章で描かれている。「全国的な現象であったらしいが、特にこの町は日清戦争の勝利が、この地方に幸して町の隆盛をもたらしたもので、この材木商人の町では、早速に新領土の台湾や勢力を新たに伸長した朝鮮へ争って支店を設けるという勢であった。「朝鮮と支那の境の鴨緑江」という俗謡鴨緑江節は、この時この地方から出稼ぎのいかだ師が後年内地に引き揚げてからはやらせたものであった」（「当時の学校」）。「崎山の鼻歌が風にのって、切ぎれに聞えて来るのが校長ねずみの歌に似ているので成石さんに聞くと、節は同じく鴨緑江くずれだが、全く別のいかだ乗りの歌だと文句を教えてくれた――。／みぞれ降る久里八丁の淵瀬

の波と／ソシテマタ旦那しはじやけんぢやけれど／いかだ乗りすりやけんしにたばる　おそざくら、はつもみぢ／ソシテマタコレコノ心意気」（「カッパの川流れ」）。一九三九（昭和一四）年に紀南観光のために作詞された「イカダ節」の「節回しは鴨緑江節に土地の盆踊り唄の節がミックスされたもの」だという。清水敬史編著『激動の紀州昭和五十年史』清水編集事務所、一九七六年、二七九頁。

（19）『地の果て　至上の時』『中上健次集　六』（インスクリプト　二〇一八年）三三二頁。

（20）宇江敏勝『熊野川――伐り・筏師・船師・材木商』（新宿書房、二〇〇七年）「日露戦争に勝って、満州（中国東北部）に南満州鉄道会社を設立し、また朝鮮に総督府を置いて支配権を固めるとともに、新宮の材木業者も進出をはかっている」二一八～二一九頁。

（21）『新宮市史』新宮市編さん委員会、一九七二年、四二八頁。

（22）宇江前掲書　二一九頁。「韓国政府が鴨緑江・豆満江の森林経営に乗り出し、（引用者注――明治）四十二年には新義州製材所が運転を開始して朝鮮材が新しい競争相手となった」という『新宮市史』四二九頁。

（23）宇江の『熊野川』で、一九一八（大正七）年生まれの中森叡は、明治二五年生まれの自分の父親が、鴨緑江の筏乗りとなり、家族をあげて恵山鎮（朝鮮）へ移り住んだ経験を語っている。宇江前掲書、九五頁。

（24）『新宮市史』七三四頁。

（25）「1937年時点の日窒コンツェルンの27社の払込資本金相学は2億8800万円、このうち、朝鮮のみに事業がある11社の払込資本金総額は1億2200万円に上り、全体の42%を占める」町村敬志『開発主義の構造と心性』御茶の水書房、二〇〇一年、三五頁。

（26）町村敬志『開発主義の構造と心性』御茶の水書房、二〇〇一年、三五～三六頁。また朝鮮帰還組による水俣での「植民地支配型の〝城下町〟」については宇野重昭「チッソ企業論」（色川大吉編『水俣の啓示（下）』筑摩書房、一九八三年）。

（27）吉見俊哉『夢の原子力』ちくま新書、二〇一二年、一一〇頁。

（28）石牟礼道子『椿の海の記』「第十章、椿」二一六頁。

（29）宇井純「第三回、チッソの企業体質と技術」原田正純『水俣学講義』日本評論社、二〇〇四年、五七頁。

（30）宇井純前掲書、五七頁。

（31）道子の祖母おもかさま――精神を病んでいた――は、「天皇陛下さまが行幸のあいだ、不敬この上ないので、本町内の浮浪者、挙動不審者、精神異常者は、ひとりもあまさず、恋路島に隔離措置」というのにも遭うのだった（石牟礼道子『椿の海の記』「第五章、紐とき寒行」、前掲書、九二頁）。これに対し、道子の父・亀太郎は、この措置を免れないというなら、「ばばさまを刺し殺して切腹いたしやす」と巡査に直訴し、この嘆願の結果、おもかさまは隔離措置を受けずにすむ。

（32）宇井前掲書、五六～六一頁。

（33）一九七二年の熊本大学第二次研究班の古いカルテの調査によれば、一九四一（昭和一六）年には胎児性水俣病と疑われる子どもが御所浦に誕生している。水俣病の公式発表は一九五六年だが、少なく見積もっても一九四〇年代からその病はすでに存在し、『椿の海の記』は、その病のはじまりの時期を描いているとも言える。

（34）宇井前掲書、藤原辰史『戦争と農業』集英社インターナショナル新書、二〇一七年。

（35）『椿の海の記』「第三章、往還道」、前掲書、六七頁。

（36）『椿の海の記』「第三章、往還道」、前掲書、六七頁。

（37）『椿の海の記』「第六章、うつつ草紙」、前掲書、一一八頁。

（38）『椿の海の記』「第七章、大廻りの塘」、前掲書、一三二～一三三頁。

（39）生産主義に抗する思想運動としての分解については、藤原辰史『分解の哲学――腐敗と発酵をめぐる思考』青土社、二〇一九年。

（40）「帝国日本が東北のみならず朝鮮でも奨励した「陸羽一三二号」も窒素肥料の反応が強い品種であった。この奨励品種を導入したら最後、肥料代の借金から逃れられない、というシステムを（引用者註――戦後秋田の『農民詩集』（新評論社、一九五五年）中の「からっぽな手」という）この詩は表現しようとしている。このシステムは、もちろん、イギリス、アメリカ、ドイツおよび日本の合成窒素肥料企業が一九二〇年代から地球規模で展開しはじめるのと軌を一にしていた」（藤原辰史『食べること考えること』共和国、二〇一四年、一七六頁）。

（41）「欧米では公（Public）・共（commons）・私（Private）の3つは別々の概念として捉えられている。Public は社会のことであり、Private は個人の私的なこと、その間にある Common（Commons）は、共有の緑地や場を指しており、名前もこのとおり分かれている。／ところが日本では「公共」という言葉で、このうち二つが一緒くたになっている。（中略）下町の路地裏を研究していた友人が聞かせてくれた話なんだけど、日本の都市における共（Common）的な空間の一例である路地裏において、その場を共有していた人びとが自分たちで掃除しなくなっていった大きな契機のひとつに、道路のアスファルト化があったという」。西村佳哲『いま、地方で生きるということ』ミシマ社、二〇一一年、一三七～一三八頁。

（42）石牟礼『椿の海の記』「第三章、往還道」、前掲書、六八頁。

（43）「封建制下の村では、物の生産と労働力の再生産の間に何ら社会的区別がなかった。家族の生計に役立たない労働などなかったのだ。子どもの養育、料理、洗濯、糸紡ぎ、ハーブ園の管理に加え、女性は農場でも働いた。家庭内での女性の働きは低く評価されることはなく、後に貨幣経済において家事労働がまっとうな労働とみなされなくなったときそうなるように、男性とは異なる社会的諸関係に組み入れられることもなかった」。シルヴィア・フェデリーチ『キャリバンと魔女――資本主義に抗する女性の身体』小田原凛、後藤亜由美訳、以文社、二〇一七年、三七頁。

（44）「とりわけ土地への権利が十分でなく、社会的な力が弱い女性にとっては、共有地の社会的機能は重要であり、生活手段・自律性・社会性を男性以上にそれに依拠していた。／（…）人が集まり、情報を交換し、相談する場所であり、そして農村社会内で起きる出来事に対して男性から自立した女性自身の視座を育む場所であった共有地（コモンズ）もまた、女性の社会生活の中心であったということである」（フェデリーチ前掲書、一一三頁）。「資本主義以前のヨーロッパで主流であったサブシステンス経済が崩壊するとともに、生産と再生産の統合――使用するための生産にもとづく社会の特徴であった――は瓦解した。これらの活動は、それぞれ異なる社会的諸関係をもたらし、性的に差異化された。新たな貨幣体制では、市場のための生産のみが価値を創造する活動と定義されたのに対し、労働者の再生産は経済的観点からは無価値なものとして考えられるようになり、労働とさえみなされなくなった」（フェデリーチ前掲書、一二一頁）。「土地の私有化と共有地を生垣で囲うことによって遂行された物理的な囲い込みの過程は、労働者の再生産の場が開放耕地から家庭内へ、共同体から家族へ、公共空間（共有地（コモンズ）、教会）から私的空間へ転換する、社会的な囲い込みによって増幅されたのである」（フェデリーチ前掲書、一三七頁）。

（45）フェデリーチ前掲書、三二八頁。

（46）「従属的で身体的な存在という女性性の新たなモデルを恐怖によって女性たちに課す魔女狩りには、賃労働者という、資本主義的規律に適合的な新しい社会的ふるまいの創造がともなっていた」。フェデリーチ前掲書、三八七頁。

（47）『椿の海の記』「第四章、十六女郎」、前掲書、八四頁。
（48）『椿の海の記』「第一章、岬」、前掲書、二三頁。
（49）『椿の海の記』「第二章、岩どんの提燈」、前掲書、四五頁。
（50）『椿の海の記』「第一章、岬」、前掲書、二九頁。
（51）ヴァルター・ベンヤミン「歴史の概念について」『社会研究誌』（Zeitschrift für Sozialforshung）の「ベンヤミン追悼特別号」（1942年）、野村修訳『ボードレール ベンヤミンの仕事 2』岩波文庫、一九九四年、浅井健二郎訳『ベンヤミン・コレクションⅠ』ちくま学芸文庫、一九九五年。ただし、引用は、柿木伸之訳によった。柿木『ヴァルター・ベンヤミン――闇を歩く批評』岩波新書、ii頁。
（52）三原芳秋は、「深く大きな宗教的感性に全身をひたしながらも、一貫してこの世界の片隅に生きる小さきものたちや、すでに死せるものたち・いまだ生まれぬものたちを、自らもその〈世界〉の一員として、ときには代作＝幽霊（ゴースト）による著作（オーサリング）の技法を用いて表現してきた」石牟礼の「もうひとつの、この世」を、ヴィシュワナータンの〈異端批評〉のプログラムと重ね合わせている。三原はまた、T・Sエリオット／西脇順三郎を補助線に、サイードの世俗批評がミシェル・フーコーのヘテロトピアと接続する〈異他―世界的〉なヴィジョンとして、石牟礼の「もうひとつの、この世」を捉えている。「解題」ゴウリ・ヴィシュワナータン『異議申し立てとしての宗教』三原芳秋編訳、みすず書房、二〇一八年、二六九～二七一頁。
（53）石牟礼道子「もうひとつのこの世へ」（『告発』十三号、一九七〇年六月）『石牟礼道子全集・不知火 第四巻』、藤原書店、二〇〇四年、四五九頁。

〔付記〕
・本論文は、大阪大学国語国文学会年度大会（二〇二二年一月八日開催）にて講演した内容を論文化したものである。当日の参加者に心から感謝申しあげる。
・本研究は、JSPS 17K02448・21K00263の成果である。

（わたなべ・えり 本学准教授）